

英国艦隊来航と宇和島藩



ハリー・パークス



松根図書



伊達宗城

宇和島という土地は不思議な魅力がある。来る2015年に「宇和島伊達400年祭」を迎えるこの鄙ひなの城市じょうしを、司馬遼太郎はこよなく愛し、吉村昭も40回をこえて訪れている。戦災と戦後の都市化で、掌てのひらにおさまりそうな城下町じょうしゆの情趣はうしなわれてしまったが、それでもこの地には南国の山と海に圍繞いにようされた地勢がかもしだす靈気のようなものがある。宇和島を治めた伊達家は江戸幕府の封建支配から忘れられたのか、この僻遠へきえんの地で250年余り、改易転封もなく、そのまま書架に行儀よくおさまりそうな歴史文化をつくっている。

歴代藩主のなかでも、明治国家の成立にかかわった八代の伊達宗城むねなりは幕末の四賢侯の一人として知られているが、宗城の高い識見ちぼうにもとづく智謀を一つ紹介したい。

第二次長州征伐が始まる4か月前の慶応2年4月下旬のこと、英公使ハリー・パークスがキング提督の率いる艦隊にのり、長崎と鹿児島を訪問する、という情報が長崎へ送りこんだ密使から宗城に届いた。宗城には外国との貿易を振興する考えがあり、シーボルトの娘イネが長崎で開いた産院をかねてから情報収集の拠点としていた。

目前に差し迫った長州再征にはなんの大義もない。長州出兵中止の口実を求めていた宗城は、パークスとイギリス艦隊の宇和島訪問を実現させることで、長州出兵を中止することを思いついた。そこでパークスの宇和島訪問を画策ずしよするよう家老の松根図書に命じ、松根を長崎へ派遣した。

長州再征の半月ほど前の5月21日、艦隊は横浜を出港し、24日に下関に寄港すると、パークスは高杉晋作や伊藤博文とも会い、27日に艦隊は長崎へ入港した。

いっぽう長崎に入った松根は五代才助を介してパークスと会う手筈を整え、大浦の公使館へでかけた。話はすぐに決着し、鹿児島から直接宇和島へ行くプリンセス・ロイヤル

号と測量船サーベント号は6月24日、パークスが乗るサラミス号は27日に宇和島を公式訪問することになった。

6月5日、長州攻めがはじまり、松山藩は周防大島へ攻め入った。しかし宇和島藩の総勢4,600人の部隊は動かず、その前隊は佐田岬半島の三机^{みつくえ}にとどまっていた。7日、長崎奉行所へ召喚された松根は、イギリス艦隊宇和島訪問の許可を得た。これに対して松根は、宇和島が僻遠の地ゆえに、西洋人に会ったこともない者ばかりなので不測の事態が起こりかねず、艦隊入港の際は「臨機の処置」をとることを奉行に承知させた。

宇和島藩はただちに大坂町奉行所に伺書を提出し、「臨機の処置」として、三机にはりつけてあった藩兵に陣払いを命じた。

測量船サーベント号が宇和島湾にすがたをみせたのは、24日の午後である。つづいて夕刻、プリンセス・ロイヤル号がその白く優雅な巨体を湾上にあらわし、錨をおろすと、樺崎砲台から放たれた15発の祝砲が夕空に花火のような音をたてた。するとプリンセス・ロイヤル号から夕陽に映える鬼ガ城連山へむけて15発の礼砲が放たれ、湾内一帯は殷とひびく砲音にふるえた。

宗城と宗徳^{むねえ}は翌日、プリンセス・ロイヤル号を訪問し終日艦内に滞在した。ワートルローの戦いのことを尋ねられたキング提督は、宗城が西洋の歴史や文化に精通していることに驚き、一緒に乗艦してきた御殿からの婦人たちも無邪気でまるで臆することがないことに感心した。26日もまる一日交流がつづき、上陸をゆるされたイギリス兵たちは小さな城下町をすみずみまで散策し、好奇心旺盛な領民にかこまれあちこちに人垣ができた。パークスが乗艦したサラミス号が27日に来着し、藩の歓迎行事は最高潮に達した。

宗城と宗徳は午前中、公式にパークスを訪問し、午後は宗城が南御殿にパークスとキング提督、それに士官20人を招き日本料理と剣術や琴三味線などの音曲でもてなした。

長州征伐などまさにどこ吹く風、である。



香港湾に碇泊するプリンセス・ロイヤル号